



特集:「学び、活かす」

komebu

コ メ ブ

komebu (「コメブ」)とは、東北芸術工科大学企画構想学科の1年生から4年生までの有志による、「みんなで美味しく楽しく山形のお米・野菜を味わうため」に企画・活動しているチーム。2014年結成。現在10人。取材を通して、彼女たちの内から次々とあふれ出る熱い言葉に、こちらも目頭が熱くなった。

生産者と生活者（消費者）をつなぎたい！

メンバーの入「du」のきつかけもそれぞれでおもしろい。「おじいちゃんが農家」「先輩に誘われた」「米が食べられると聞いた」。その一方で、komebuメンバーの思いは一本筋が通っている。

『お米をはじめとして優れた農産物を宝のようにつくっている山形の生産者の方たちの想いに共感し、生産者と生活者（消費者）とのよい出会いをつくり、皆の笑顔につなげたい！』

この思いをカタチにするため、メンバーは大学の授業を通して企画力を研

鑽し、komebuの活動を通して「美味しく、楽しく」農業と向き合っている。

農業を知ってもらうには

komebu 部長の栗田日向(ひゅうが)さんは鶴岡市出身で、小さいころから農業が身近にある環境で育った。農業に対する情熱も人一倍強い彼女は今後の活動についてこう話す。

「最近の子供たちは家の中にいることのほうが多いと思うけど、外に出て自分の手で感じる事が大事。それによって農業の素晴らしさや大変さ、食へのありがたみを感じるようになる。komebuの活動を通してそういった機会を増やし、沢山の人の心を広めたい。」



↑農業の面白さを伝えたいと話す栗田さん



個性あふれるメンバーたち。

企画をカタチにした人、構想段階だけど熱い思いを抱いている人。

それぞれが、それぞれらしく「山形」「農」「食」をキーワードに、楽しく美味しく（時に辛く）取り組んでいる。

齋藤優有(ゆう)さん

「農家の人たちは自分たちが作っているものに自信と誇りを持っていることを知った。そういう自信や誇りをたくさんの人に広め、山形全体が素晴らしいところだねと思ってもらえるような橋渡しをしていきたい。」



仁藤涼太(りょうた)さん

「小学生の時に『命の学習』で食や農家へのありがたみを学んだが、成長するにつれて薄れていくことに気づいた。物として思い出に残すにはどうしたらよいかを考え“kome bin (*)”を企画・制作した。感謝の気持ちを瓶に『込め』ることで『米』という意味を掛けた。」

*卒業制作として2020年2月6~11日開催の東北芸工大卒展で展示される予定。

土田遥子(ようこ)さん

「都会も便利でいいものだけど、自然がないと息苦しくて必要なものは残していかないといけないと思う。komebuを通して、楽しみながらも貴重な体験をしているということに感謝し、活動していきたい。」

— komebu はじのような経緯で誕生したのでですか？

山下教授 きっかけは「やまがた有機農業推進コンソーシアム」との共同企画活動から。山形のお米の美味しさを知ってほしい、一緒に良い場所を作っていきたい、作っていく過程も楽しくありたい、との思いから誕生しました。

学生たちが緩く、楽しい集まりを意識して、現地で話を聴いたり農作業を行ったりしながら、学生が地域でできることを探っています。

今回の取材を通して学生たちの熱い気持ちを改めて知りました。いい企画ですね(笑)。



東北芸術工科大学デザイン工学部 企画構想学科 山下 英一 教授



これまでの主な活動

村山市「大高根わんぱく道場」

大高根わんぱく道場に参加させていただき、田植えや稲刈り、もちつき、里芋掘などを体験した。そして「JUNE 祭」と題し、ジュンサイすくいや、ジュンサイ沼を活性化させるアイデアを考えるワークショップを行った。

こめパーティー

農業関係者の方や友人を招待してお米を味わう会。お米を食べるだけでなく、関係者の方との会話の中で農業の勉強もしている。komebuから多くの人へとお米の良さや農業のおもしろさを伝えるきっかけにしている。